

18年度版教科書で生徒にこんな力をつけたい

1年「野原はうたう」

— ペア朗読での読み取りを通して対話力と朗読力の向上を —

新しい学習指導を考える会

▼「国語」1 P.14-15「野原はうたう」



「のはらうた」は授業開きに最適
真新しい教科書を抱え、教室のドアを開けて教卓の前に立つと、教室の中の若い視線がすべてわたしに向けられる。手は膝の上に置かれ、期待と不安に輝く目がまぶしく感じられる。一年生の授業開きは、いつも期待と緊張の中で始まる。この状況を早く、和やかで明るく、そして対話のできる教室にしよう。国語の教師ならだれでも考えることかと思う。そんな思いを抱き、さまざまな授業開きにトライしてきた。教科書の教材を使ったことも、そうでないこともあった。そんな中で最も効果があった授業は、光村図書平成12年度版の教科書教材「野原はうたう」を使った朗読の授業だった。その理由は三つある。

- ・朗読の際に花や昆虫になりきることに
よって、感情移入がしやすい。
- ・ゼスチャーなどを交えながら楽しく朗読
できる。
- ・生徒の表現力と読解力の判定ができる。

三点目の判定は、声の大きさや発音などの言語事項と読解力や表現力に関する評価である。生徒の緊張感を取り除き、楽しく学習が行える「のはらうた」は、授業開きに最適な教材だった。

二 個性が発揮できる四編の詩

平成18年度版教科書の一年第一単元は「野原はうたう」である。しかも12年度版の教材よりも授業における朗読活動を意識した詩が四編そろえてある。質、量ともに改善がうかがえ、この教科書全体のコンセプトも感じられる。今回の教材の冒頭には作者である工藤直子さんから生徒たちへの呼びかけの文章が加えられている。作者は海や山、野原の生き物たちから聞こえる声やメッセージに耳をすませてこの詩を書き留めたそうだ。四編とも一人称形式で述べられており、呼称も違う。生徒たちはそれぞれの動植物になりきり、詩に詠まれた心情や世界を音声言語で個性的に表現することができる。それぞれの詩の世界を比較して読むこともおもしろい。「みなさんも耳をすませてみてください。そして、仲間たちといっしょに、うたうてやってください。」と作者が語りかける。中学の勉強はいきなり難しくなるのではないかと気にしていた生徒からは、ほっとしたため息が聞こえてくるようだ。

三 国語の授業は対話づくりから

国語の授業は対話づくりから始めたい。なるべく知らない者同士に対話の機会を与え、そしてその範囲を広げる。やがてはクラスの全員がだれとでも対話することができるようにしていきたい。生徒の国語力を伸ばすためには、クラス内の対話力を向上させる必要がある。わたしは、この「野原はうたう」という教材を使った朗読の授業の目標を次の二つにした。

- ・ 対一の対話で協力し合うことができる。
- ・ 聞き手の心に響くように、声全体で気持ちを表現する。

一つの目標に向かって互いに意見を出し合うのが対話である。わたしはなるべく異なる小学校出身の生徒同士をペアにして、互いに意見を出し合いながら、共同して朗読する授業計画を考えた。そして、声全体で気持ちを表現することを意識しながら練習するように働きかけることにした。対話でもスピーチでも、論理的な型を教えて言葉を並べたとしても、聞き手の心を動かすことは容易ではない。聞き手の心を動かすためには発声の力が大切なのである。



▲「国語」1 P.16-17

▲「国語」1 P.18

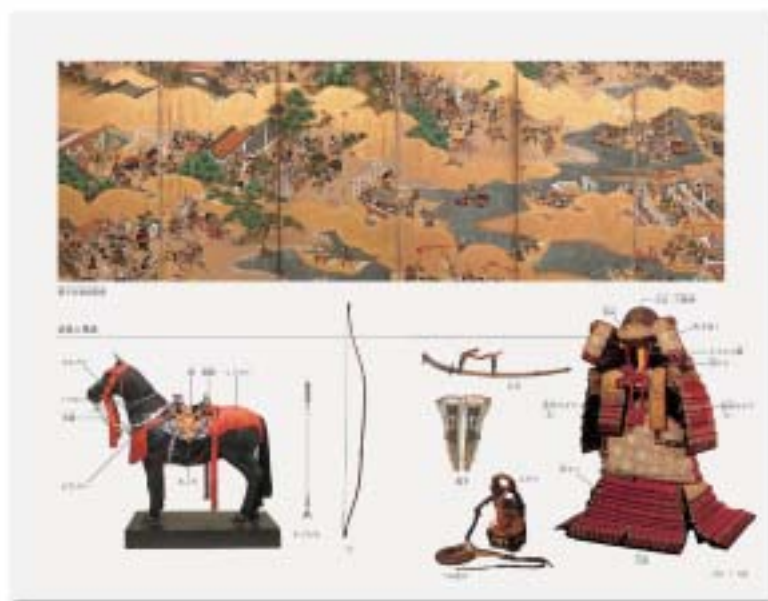
18年度版教科書で生徒にこんな力をつけたい

2年「扇の的」『平家物語』から

— 百人一首の源平戦から古典へいざなう —

新しい学習指導を考える会

◀「国語」2 P.109-110「扇の的」



古典学習に親しませる一つの工夫として、百人一首の源平戦に取り組ませるようになっている。二三人で一チーム、五十枚ずつを並べ、早くなくなった側が勝ちという団体戦である。新年の一月の第一・三週に、学年百人一首大会を開催する。近所に百人一首の名人がいれば、「読み人」として招待してみるのも一興だろう。生徒たち

に、百人一首大会のクラス対抗戦という意識をもたせることは、自然に古典を学ぶ姿勢を身につけさせることになる。二年生になると、その源平戦の様子を描いた『平家物語』が教科書に登場してくる。生徒は、小学校でおぼろげながら平家と源氏の争いを学んできている。その歴史的背景の説明をするときに、18年度版のB5判でゆったりした紙面は有効だと思ふ。まず、今までは巻頭にあったカラー写真が、その單元の中におさまっている。つい忘れがちになる資料が、学習時にわかりやすい位置にある。源平合戦図屏風が特によい。白旗が源氏方、赤旗が平家方ということがよくわかる。本編の「扇の的」の場面も中央に描かれており、説明しやすい。与一のかぶら矢、弓の大きさも加えるとおもしろいだろう。

冒頭部分を暗誦させたい。合わせて平曲のCD、テープなどを聞かせることも大切であろう。

五～六人の群読をテープに録音して聞き合つことも生徒の興味を深めることになると思われる。特に、「扇の的」の部分は胸高鳴る有名な場面であり、文章は七五調でテンポがよい。読みやすいという体験を積み重ねることは、大いに生徒の学習意欲を高めていくことだろう。社会科での学習は、

四 ペア朗読で朗読力をつけたい

ペア朗読とは、二人一組で、詩の一行ずつを繰り返して朗読する方法とする。例えば、A君が「おう あついで」と言つたあと、すぐB君が「おう あついで」と続けていく朗読。教材は「うちゅう・いるか」「あしたこそ」「おれはかまきり」のどれかと、「ひかる」は必ず朗読することにする。この朗読の目標は三点ある。

- ・二人の音量や声の響きをそろえる。
- ・二人の声全体で気持ちを表現する。
- ・腹式呼吸で口をしっかり開け、切れのよいなめらかな発音をする。

発表の際にゼスチャーを入れてもよいことにする。二人で声をそろえることにより、一人のときよりも思い切つて声を出すことができると思ふからである。さらにお互いに表現にこだわることにより、朗読における表現力を磨き合つことが期待できる。

五 ペア朗読で楽しもう

授業は二時間計画。最初の授業ではいろいろな説明したくなりがちだが、必要ときに説明をするようにして、早速授業を始めたい。そうでなくても生徒たちは説明ばかりの緊張した数日間を過ごしてきていると思ふからだ。

授業者の自己紹介とこれから行う授業についての説明（5分）。

ペアは出席番号の前後で男女別。同じ小学校出身同士が組んだ場合は、前後で組み合わせを変える。人数の都合で男女で組まなくてはならないグループができるかもしれないが、その場合は男女でもグループにする（5分）。

グループができたら、本時の授業目標と評価規準を伝える。

読み方の工夫をすることができたか。

（観察、ノート）

朗読の練習ができたか。

二人とも暗唱した：A

どちらか一方が暗唱した：B

二人とも暗唱していない：C

次に朗読の作品決めに移る（1分）。

挙手による調査をする。次に、ペアでどう読むか、強弱のつけ方やスピードの調整について話し合わせる。このとき、まずはアイデアだけを互いに話し合い、相手の意見を批判しないというルールで行うフリーストリーミングをさせる。出た意見はすべてノートにメモするように指示する（5分）。

その後、詩を視写し、メモを見ながら読み方原稿を作っていく（15分）。

原稿ができたところから練習をする（15分）。

最後に本時の反省と、次回の連絡を行う（5分）。

評価規準 については、観察とノートの点検で評価できる。については今回は手を挙げるだけにして記憶にとどめ、次回のペア朗読で評価する。その際、生徒一人一人の音声表現力も判定する予定である。

音読を楽しもう

言葉を身につけ、楽しむこんな工夫もしています

その3

18年度版教科書の古典単元の冒頭には、各学年ともに音読に適した作品を掲載しています。声に出して読むことで、古文の言葉の響きや調子に親しむことができます。

▼「国語」1 P.106「いろは歌」



▼「国語」2 P.106「枕草子」



▲「国語」3 P.114-115「古今和歌集 仮名序」

「平家物語」が一つの読み物、平曲として語り継がれてきたことを教えてくれるだろう。『吾妻鏡』『源平盛衰記』などがあることもひと言添えたい。軍記物語ではあるが、華やかな部分だけではなく、人の世の無常観も底流に流れていることを教えていくことも大切だと考えられる。

さて、今年はNHK大河ドラマで「義経」が放映されている。ほとんどの中学生にとって、なじみのない時代劇であるが、主人公に人気の若者を起用して、話題になっている。そこで、この扇の場面を芝居に仕立ててみるのもおもしろいのではないだろうか。

前述の群読に加え、役柄を決めてセリフだけのラジオ劇風にも試みることも考えられる。効果音やBGMなども加えてみよう。と提案すれば、生徒の発想も豊かになってくるのではないだろうか。さらに、これを紙芝居に仕立ててみたり、紙人形劇に仕立てたり、寸劇として実際にやったりしたらおもしろいだろう。学年で話し合ったり、総合的な学習の時間で取り組んでみると、授業時間の確保ができるかもしれない。各クラス代表の班を選び出して、学年全体で発表できれば、古典への興味・関心を大きく引き出すことができ、社会科、音楽科などとともに、総合的な取り組みとして成立できると思う。

冒頭の「祇園精舎の鐘の声」に始まる部分も、18年度版の教科書では大きく丁寧で紹介されている。以前は「平家物語」といえばこの冒頭部分を暗誦させてきた。最近では、小学生のころからこの部分を暗誦できる生徒もいるようだ。七五調の調べと、もともと平曲として語り継がれてきたものであることを教えるきっかけにもなる。

そして、出席番号順に発表させる。自分の番が来るといふ胸の苦しさや緊張感、国語の授業ではめったにないものではないだろう。

のあたりを自分で調べたり物語にしたりしてみてもどうだろう。また、弁慶についての言葉は多い。弁慶の泣き所、弁慶の七つ道具、弁慶蟹、弁慶綱、弁慶草、弁慶遣手などである。武蔵坊弁慶伝説などを研究させ、自由に物語にさせてみるはどうだろう。ここでも授業時間との戦いがあるが、朝学習や「総合的な学習の時間」での協力が得られれば、大いに内容理解は深まるであろう。新聞形式にする利点は、写真、イラスト、四コママンガ、詩など、いろいろな表現ができて、一覽性に優れていることである。

これらの学習は、三年生の教科書に掲載されているおくのほそ道」の平泉の段につながっていくことも付記しておきたい。

▼「国語」2 P.111「扇の的」



18年度版教科書で生徒にこんな力をつけたい

1年「坊っちゃん」

— 現代に通じる話題を共有し、名作を味わう楽しさを —

新しい学習指導を考える会

▼「国語」1 P.234-235



▲「国語」1 P.226-227「坊っちゃん」



「フランス人のくせにナポレオンを知らず、アメリカ人のくせにワシントンを知らぬ」というのは三年生の教材である「故郷」の一節だが、「日本人のくせに（この言い方には抵抗を感じるので、『日本語を学んでいる者のくせに』と改める）漱石を知らない」まさに中学校を卒業していた時代がやっと終わり、「坊っちゃん」が教科書に帰ってきた。

まずは歓迎の気持ちを生徒に（滑稽と思われるほどに大げさに）表現しよう。漱石や『外』の作品が教科書から消えていた間にも生徒たちの活字離れはいつそう進み、千円札の肖像画の座も野口英世に譲って、我らの文豪の知名度は風前の灯火であった。難しい講釈は抜きにして、この二人が近代文学の中できわめて特別な存在であり、当然読まれるべき対象であるという認識を生徒にイメージさせることから授業に入っていきたい。

昨今の社会や教育課題の変遷を脳裏に浮かべながら、教材文としての「坊っちゃん」を改めて読み返してみると、その内容に共有・共感できる生徒たちはむしろ以前よりも増えているのでは、と思う。一例を挙げれば、両親ともに不在な家庭。または兄弟の中で不当に虐げられている者。生徒

という強い気持ちを伝えたい。

書齋がない家に住み、親が読書している姿を見たことがない生徒を、テレビやゲーム、さらにはメールやインターネットの前から引きはがし、読書の世界へ誘うには、なによりも、その魅力を語る教師自身の思い入れの大きさが問題になるだろう。坊っちゃん（主人公）と清との関係と同じく、共感と愛情によって結ばれた本と自分との関係を熱く語る。

の目から見れば、「乱暴で乱暴で行く先が案じられる」と思えるような級友も増えているだろう。さらに作品全体の内容に思いをはせれば、松山という異郷の地へと一人向かう坊っちゃんと同じく、言葉も文化もまったくわからぬままに異国より教室へとやってきた生徒たちも大勢この教科書を開いている。

「名作」と言われる作品のもつ時代を超えた普遍性を語り、生涯を通じて文学を楽しんでいける生徒を育てたい。

この教材を学ばせるうえでいちばんの目標は、と問われれば、『坊っちゃん』の全文を読ませることにはかならない。どのようにして生徒たちをこの作品の世界に引きつけていくか。

冒頭部分の幼少期のエピソードの読み取りを通じて主人公の人物像をとらえ、読書することのおもしろさを体験させる、という正門から入っていく。さらに、前出した「千円札の顔」としての作者漱石をきつかけに、教材半ばから後半にかけて幾度となく登場するお金の価値からアプローチする方法もおもしろい。「後架の中へ落としてしまった」（水洗トイレ以外全く知らない生徒にはさらなる説明が必要であろうが）お金はいくらなら取り出して洗って使う気

になるか。「三年間は勉強できる」という六百元。そして中学校の新任教師の月給の四十円。これらが今なら「夏目漱石何人分？」という問いかけも、あえて教材末の語注にそのあたりの記述が一切ないことで可能になる。

前半の「無鉄砲」な人物が、後半で「生来どれもこれも好きでない」はずの「学問」を修めて、「教師になる気も、田舎へ行く考えもなにもなかった」にもかかわらず、「即座に」四国行きを決意した場面で、現代の大きな社会問題である「ニート」の話も持ち出してみたい。その場の決断（というが無鉄砲な思いつき）で行動している点で、今日の若者と「坊っちゃん」には共通するものがあるが、学問や就労に対する意識には大きな隔たりがあることを語ろう。ただ、道徳的な説教ではなく、これらも名作は多様な読みができることの紹介という形にしたい。

全文読破への意欲を喚起するにはあらずの紹介は不可避であるが、作品の随所に地方蔑視的な表現があることには注意が必要かと思う。舞台が生徒たちにとってはもっとも身近な「学校」であるという点と「勧善懲悪」という大変にわかりやすい展開を通して読書の楽しさを経験してほしい